

万行寺報

Mangyoji Jihō

発行
浄土真宗本願寺派 万行寺
住職 山崎信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾4 6 1 - 1
電話 0267-67-2460

2024(令和6)年

仏暦2567年

2月号

(第149号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



住職 法話

漏れることのない救い

正信念仏偈に学ぶ
凡聖逆誘齊回入
如衆水入海一味
凡聖・逆誘齊しく回入すれば、衆水海に入りて一味なるがごとし。

「現代語訳」
凡夫も聖者も、五逆のものも誘法のものも、みな本願海に入れば、どの川の水も海に入ると一つの味になるように、等しく救われる。

信心を得て恵まれる「ご利益」が続きます。
その二つ目が「平等一味の益」です。どのような人であっても、平等に救われるという「ご利益」です。
親鸞さまは、ご自身の著『尊号真像銘文』に、詳しく解説されています。
「凡聖逆誘齊回入」というのは、小聖・凡夫・五逆・誘法・無戒・一闡提などのさまざまなもの、自力の心をあらためて真実

信心の海に入れば、みな等しく救われることを、どの川の水も海に入ると一つの味になるようなものである。とたとえているのである。このことを「如衆水入海一味」というのである。

仏を大聖というのに対し、それ以外の聖者や菩薩のことを「小聖」、愚かなものという意味の「凡夫」、五種の重罪を犯すもの「五逆」、仏の教えをそしるもの「誘法」、戒律がないもの「無戒」、仏を信じず、さとりを求める心がないもの「一闡提」といったさまざまものをあげられています。

この中で、「五逆」と「誘法」について、ちょうど一年前の二月号の寺報に、法蔵菩薩の四十八願の中の十八番目の願い本願について取り上げました。法蔵菩薩がすべての人々の成仏を願ったものですが、最後に、「五逆」と「誘法」のものは除くことがあります。ここで、「五逆」と「誘法」のものも救われるのかという矛盾が感じられますが、「自力

の心をあらためて真信心の海に入れば、みな等しく救われる」と、「信心」の大切さを示されるのです。「五逆」と「誘法」というのは本当に重い罪であるということを知らしめながら、「信心」を得た人の「ご利益」ということであげられたのだと味わえます。

親子関係と仏さまとはほど遠い喩えですが、私の娘は、この四月から中学生になりました。成長とともに、言うことも一人前で大声で叱つたりすることが増えてきています。親の心配事に対して、言い訳ばかりしてきてきます。子は「またか」という思いでそこから逃れようとしています。しかし、親とすれば社会に出て困らないようにと叱咤激励のような思いで、してはならないことを子に知らしめていくのです。
重い罪を許すということではなく、仏のはたらきに基づき信じることよって、結局はみな漏れることなく救われることを説いています。

浄土真宗 ⑧ 仏事のイロハ

四、法要・行事

— 仏縁を深めよう —

「私の仏縁として」

法事は何回忌まで勤めるの？

「法事は何回忌まで勤めたいのですか」と尋ねられることがあります。

こうした質問は、概して、年月が経って亡き人への思いが薄れ、法事を営む煩わしさや負担感が増してきた頃に出てくるようです。少なくとも、法事を積極的に勤めたいというのではなく、「故人の供養のために」区切り」となるところまでは、「」ということでしょうか。

そして、その「区切り」が五十回忌だと思っている人が多いようです。

しかし、最近では、もっと早く「切り上げられる」傾向にあり、とても残念です。



ともあれ、「法事は五十回忌でおしまい」という捉え方には、多分に民間信仰の影響があります。民間信仰では、亡くなる年忌ごとに「追善供養」し、死者の霊を鎮め、浄めます。これを怠ると霊が迷ったり、時にはタタリとして私たちに災いをもたらします。そうならないためにも、きちんとして法事を勤めなければならぬというわけですね。五十回忌まで勤めると、死者の霊は完全に浄化され祖霊（カミ）となります。祖霊になるともう災いをもたらすことはなく、私たちの役目も終わるといふ図式です。これでは極端に言えばタタリを起こ

さないために法事をするようなものではないでしょうか。仏教では、そういう法事の捉え方はしません。故人のためではなく、あくまで「私のため」の法事です。つまり、今こうして生かされている私のいのちの尊さを、亡き人を偲びつつ味わわせていただくのです。生前、ともに生活した故人であれば、その遺徳を偲び、また遠い先祖の方であっても、そうした方がたのおかげで私のいのちがあり、何よりも尊い仏法を伝えてくださったと喜ぶのです。

ですから「五十回忌でお願いします」ではありません。故人を起点に考えるのではなく、私を起点に、生きている限り勤めて、仏縁を持つてくださいます。仏事は継続することが大切なのです。五十回忌以降は通常五十年おきにお勤めします。

「浄土真宗 ⑧ 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より

年忌法要表

1 周忌	2023 (令和 5) 年	23 回忌	2002 (平成 14) 年
3 回忌	2022 (令和 4) 年	25 回忌	2000 (平成 12) 年
7 回忌	2018 (平成 30) 年	27 回忌	1998 (平成 10) 年
13 回忌	2012 (平成 24) 年	33 回忌	1992 (平成 4) 年
17 回忌	2008 (平成 20) 年	50 回忌	1975 (昭和 50) 年

編集後記

今回の「仏事のイロハ」は年忌についてです。様式は変えずに寺報には「年忌法要表」をのせています。(右の表)先立たれた方を偲ぶとともに、あらためておかげさまのいのちに気づかされる場としてお勧めしています。目安にして、大切な方を思い起こす仏縁を大切にして欲しいです。